

ひがしひろしま 郷土史研究会ニュース

No.611

2025年 7 月

6 月例会報告

6 月例会は 6 月 28 日(土)、市役所北館市民協働センターで開催され、29 人が参加した。

冒頭で赤木会長は、「ちょうど 80 年前は沖縄戦が終了した直後で、佐世保が空襲された日だった。敗戦が濃厚な中で、日本はポツダム宣言を受諾することができず、原爆投下に至った。終戦後も、厚木で徹底抗戦の動きがあるなど、戦争を終わらせることは困難である。思いを新たに、本日の丸本さんの発表を聞きましょう」とあいさつした。

研究発表は丸本富美子氏による「日清戦争から終戦まで(台湾との関係中心)」。

2024 年 1 月の能登半島地震があった後、台湾民間人から多額の寄付があったことから台湾に興味を持ったこと、原爆資料保存会で戦争をなぜ止めることができなかったのか疑問を持ったことを説明された。その後は、日清戦争後の日本占領から、台湾のインフラ整備、殖産興業、その間に起こった抗日運動、台湾で活躍した日本人に関して紹介し、満州事変から日中戦争、第二次世界大戦開戦、転機になった戦いや戦後補償までの流れまでを説明した。通常の郷土史とは違い大きなテーマではあったが、戦後 80 年を振り返るにふさわしい例会であった。

が、予定時刻になっても一部の参加予定者と連絡が取れない。ようやく電話がつながると、体調不良で行けないと言う。重苦しい中で、17 名を乗せて、山陽道を下っていく。

2 人がけの席に 1 人で座っているので、会話も少なく静かであったことは、寂しい限りである

《下瀬美術館》

9 時 20 分に到着。玄関前に駐車してもらい、皆さんに笑顔で降車していただいたので、ほっとする。蔵楽さんの提案により、割引を受けて入館することができた。経費を抑えるためには、ありがたいものである。

チケットを受け取って入ると、水盤の上に並ぶ可動展示室に入る。この美術館の特徴であり、展示の内容によって様々な配置パターンを楽しむことが出来るという。今回は、現代美術がテーマとなっており、各展示室にはアジアの若手アーティスト 9 人の独創的な品々が並んでいた。私にとっては、作者の真意がわからないまま進んでいく。

むしろエミール・ガレの庭という庭園には感動である。ガレの作品に登場する植物を楽しむことが出来る空間であった。展示室を出ると廊下が、ガラス張りになっていることを知る。

続いて、ピラミッド状の丘を登っていくと展望テラスである。瀬戸内海に浮かぶ島々を一望することが出来た。好天に恵まれたことで遠くまで見る事が出来て、絶景のスポットであった。こうしてロビーに戻り、ショップやカフェを覗くと、その値段にびっくり。土産を買うことはなかった。展示室をバックに記念撮影をして出発する。美術品より、外観を楽しんだという印象であった。

春の臨地研修

三嶋 昇

令和 7 年度の臨地研修は、5 月 22 日に行うことで進めてきた。夜中に降り続いていた雨は、朝 6 時ごろ上がった。回復してきた天候にほっとして、参加者は芸陽バス本社に集まってくる。

7 月例会のご案内

日 時 7 月 26 日(土) 13:30～
場 所 市役所北館 市民協働センター
発 表 「原爆投下の日 志和での体験記」
吉本正就氏



《岩国白蛇神社》

厳島神社の御祭神を勧請し、平成24年（2012）に鎮座祭を斎行し創建された。「岩国市民の長年に亘る白蛇への保護と信仰に基づき、昭和30年（1955）白蛇保存会の設立により半世紀を経ての悲願が結実した」ということが説明板に書かれていた。シロヘビをモチーフにしたデザインが随所に取り入れられていた。

参拝後、境内横を進むと、屋外飼育場があり白蛇とご対面である。10匹くらいが来訪を歓迎してくれたようである。さらに奥に進み白蛇観覧所に入ると、屋内飼育所にも3匹いた。スマホをかざしながら年配の女性が、「動け、動け」と言っていたが動く気配はなかった。宝冠白蛇弁財天社を回って戻ってくると、白蛇が動いている姿を見る。先ほどの女性は大喜びであり、私も同感であった。

《岩国観光ホテル(昼食)》

昼食は、岩国寿司のオリジナルランチであった。特産の「ハス」が、ふんだんに入っていておいしかった。一息入れると、ここで岩国ボランティアガイドさん2人と合流する。挨拶等を済ませると、錦帯橋に向かう。日本三名橋の一つとして数えられている全長約200mの美しい五連アーチの木造橋である。入場セット券を購入すると、2班に分かれる。私はすぐに橋を渡るが、もう1班は河川敷に降りて、下から橋を見上げて説明を受ける。



《錦帯橋》

《誕生秘話》 流されない橋をかけるため研究を続けていた3代岩国領主（藩主）吉川広嘉、明の帰化僧で医者でもあった独立（どくりゅう）と出会い、独立の故郷の「西湖遊覧志」を取り寄せて、ヒントとなった絵図を見つけた。小島から小島へと次々と渡される石橋が描かれており小島のような頑丈な橋脚を作り、その間をまたぐアーチ橋を思いついたとされている。

《経歴》 延宝元年（1673）、五連の木造アーチ橋が完成する。技術の粋を集めた錦帯橋は創建

の翌年に洪水によって流出した。が、すぐに再建されて技術の伝承により架け替えを繰り返し、276年間不落を誇ったという。昭和25年（1950）のキジア台風により、橋は流出した。翌年には、再建が開始され昭和28年（1953）に完成。平成16年（2004）の架け替えを経て、現在に至る。錦帯橋の工法は、現代力学の法則に合致していて何ら改善の余地はないと言われている。強度は、江戸時代も同等であったとされている。錦帯橋の美しさは、江戸時代中期以降から評判になっており、当時山陽道から外れた場所に造られたにもかかわらず、参勤交代の大名たちもその名橋を見るために、わざわざ迂回し錦帯橋を見学してから江戸に向かったと言われている、と説明を受けた。

《吉川広嘉像》

錦帯橋を渡り、しばらく進むと吉川広嘉像に出合う。岩国領3代領主として産業の振興を行い、錦帯橋を架橋した領主である。読書に親しみ、武芸を好み、学問心と技術心を重んじる政策は、岩国文化の開祖と仰がれている、とのこと。

《香川家長屋門》

岩国領五家老の一つ、香川家の長屋門。元禄6年（1693）に建立され、当時の武家屋敷の構えを残している。岩国市内の木造構造物として最古級の一つで、城下町の風情を残す建物として山口県の文化財に指定されているとのこと。

《吉香公園》

吉川家の居館や家臣の屋敷跡地に造られた公園。日本の歴史公園100選に選ばれている。

《旧目加田家住宅》

目加田家は、近江国愛知郡の出身で吉川家が岩国に移封された際に、領主広家に従いこの地に居を構えた家系で俸禄（ほうろく）170石。建物は、18世紀後半と見られる中級武家屋敷の数少ない遺構として、国の重要文化財に指定されている。木造一部二階建てで入母屋造りである。屋根の筋葺きは、二種類の瓦を交互に重ね合わせる特殊な形で、岩国地方に集中して見られる地方色として注目される。内部には様々な部屋があり、江戸時代の岩国の武家住宅の様式を残している。昭和52年（1977）10月より解体修理を起こし、昭和53年（1978）12月に竣工したことが書かれていた。裏庭では、ボランティアガイドの方が清掃作業をしていた。きれいに管理されていると、気持ちよいものである。

こうして、ロープウェイの乗車口に来るとティータイムである。歩き続けていたので、冷たいお茶はおいしかった。

《岩国城》

〈旧天守台〉 ロープウェイから眺める眼下の景色に感動であった。ロープウェイから降りて、進んでいくと途中「大釣井」という水場である。慶長13年（1608）の築城時に造られたと説明板に書かれていた。さらに進むと縦堀があり、旧天守台の石垣が見えてくる。平成6年（1994）に発掘調査を行い、翌年より復元工事を行ったとのこと。城郭内で最も古い構造で、粗割石による古代穴太積（こしきあのうづみ）の技法が使用されているという。

さらに北の丸跡には、約400年前の築城時の石積を見ることが出来る。

〈空堀〉 山頂に城郭を築き、防御を主体とした空堀を築造したものは、全国的に見ても珍しいということが説明板に書かれていた。幅約19.6m、深さ約10m、長さ約58.2mと日本最大の箱堀構造であるという。どのように城攻めを行えばよいかという思いをはせながら進んで行く。やがて天守が姿を現す。

〈岩国城復元天守〉 山頂の要害と山麓の居館を持つ岩国城。その造りは三層四階の上に物見をおくもので、上の階が下の階より大きく張り出す珍しい構造から、桃山風南蛮造りとも称されているとのこと。江戸時代初期に築かれた石垣造りの近代城郭である。昭和37年（1962）に、旧天守台より南へ約50m移動して建立されたという。城の中に入るとすぐに献納された太刀の説明があった。以後各階で展示品の説明を受けながら天守に上がる。ここから見える景色は、まさに絶景でありジオラマを見ているようである。蛇行している錦川の姿が分かる。床面には、岩国領全図が描かれている。幕府公認の藩ではないため「岩国領」と呼ばれていたとのこと。正式に岩国藩となったのは、明治元年（1868）からである。



目の前に見える柱島は、連合艦隊司令長官山本五十六が、太平洋戦争の開戦となる打電をしたところである、との説明もあった。ここか

ら見る景色に見とれて、言葉が出なかった。お城の入り口の絶景スポットにて記念撮影後、石垣沿いに進んでいく。往時の石垣に感動していると、これらは近くの山から石材を切り出して運んできたという。築城当時に石を切り出すための矢穴が、今も残っているとのこと。

〈二の丸広場〉 二の丸広場を進んでいくと大手門である。階段を降りると出丸跡があり、さらに進んでいくと、当時往来した道が見えてくる。左手に見える石垣が往時のことを伝えてくれるようでもあった。こうして、からくり時計が立っている広場に着く。

ロープウェイ山頂駅に戻ってくると、15時30分過ぎであった。この時、これからどうするかという決断を迫られた。当初は、吉川資料館等を見学する予定であったが、吉香公園ルートを進んだので、コースから外れてしまった。さらに出発の時刻が近づいていたので、入館しないと伝える。入館したいと思っていた方もおられたので断腸の思いであった。事前にガイドさんに伝えておくべきことであった。幹事の反省点である。よって、ロープウェイで降りると二手に分かれて行動することとなった。

《御土居跡》

景観重要建造物に指定されている吉香神社を通り抜けると、御土居跡という説明板が見えてくる。歴代領主の居館（御土居）があった場所。明治以降に解体されたようだが、堀や石垣が残っていた。元朝登城之図が描かれていた。すぐ近くに全国屈指の古桜として、明治19年（1886）に植樹された岩国最古のソメイヨシノがそびえていた。

《岩国徴古館》

昭和20年（1945）、建物が竣工。戦時中に建てられた珍しい博物館である。構造体にはレンガを使用し、外壁には溶鉱炉から出る鉱滓で作ったブロックを貼っているという。平成10年（1998）に、国の有形文化財に登録されたとのこと。常設展示室は、幕末維新記念コーナーとして、岩国ゆかりの人物や当時の事件を映像や写真と文字で紹介していた。時間の余裕がなく5分くらいで退出した。

《吉川資料館》

平成7年（1995）11月に開館。始祖より800年の歴史を持つ吉川家に伝来した歴史資料、美術工芸品が7000点所蔵されているという。今回は、吉川広家公没後400年プラス開館30周年記念の展示となっていたが、時間の都合で入館出来なかった。残念がっていた方もおられたので、申し訳なかった。

《佐々木小次郎像》

「祖先以来岩国の住、姓は佐々木といい、名は小次郎と親からもらい、また剣名を“巖流”とも呼ぶ人間はかくいう私であるが…という吉川英治の小説「宮本武蔵」の一説である。当地では、古くから小次郎が錦帯橋畔にて柳の枝が、つばめを打つを見て“つばめ返し”の剣法「巖流」を生み出したと言い伝えられていることが彫られていた。

《吉川経家弔魂碑》

羽柴秀吉の鳥取城住攻めに対して、城主山名豊国は降伏した。が、豊国の家臣たちが吉川元春に城将の派遣を要請し、石見国温泉津福光城主吉川経家を城督に命じた。が、時間が経過するに従って餓死する者が続出し、その惨状は言語に絶したという。開城の条件として城兵全員の救助を誓約し、天正9年（1581）10月25日に城内広場で切腹したとのこと。35歳であったという。その英魂を弔うため昭和14年（1939）に建立された。礎石に鳥取城の石12個が使用されているという。

《見学を終えて》

錦帯橋への帰り口に戻って来ると、休憩所でソフトクリームを食べている人たちと合流。暑かったので、ソフトクリームを食べて疲れを癒す。出発時刻を過ぎていたが、ガイドさんとの別れを惜しみながらソフトクリームを頬張っていた。食べ終えた人から順次、錦帯橋下河原駐車場に向かっていく。15分遅れで出発する。

帰路の車内で、臨地研修参加者の推移について話をする。コロナ禍前までは平均して42人の参加者であった。コロナ禍後では、平均20人となっている。途中、宮島SAで休憩を取り、18時13分にほぼ予定通りに芸陽バス本社に到着。安全運転で、私たちを楽しませてくれた運転手さんには感謝するばかりである。そして、それぞれの車で無事に自宅に帰られることを念じて、研修旅行を終了する。

《あとがき》

今回も、出発3日前に最終の連絡を行う。すると夕方から夜にかけて、4人から体調不良でキャンセルするとの連絡が入る。さらに出発日もキャンセルという予期せぬ状況となった。募集時は25人の参加希望者があったので、計画を進めていた。9人の不参加で、妻にも協力してもらい17人で挙行することとなった。

体調不良はどうにもならないことであり、これは次回も想定されることになる。不参加による支出の不足分は、参加者への負担を避けたいとの思いで、会長と相談して本会より補填する

こととした。ただ、これを常態化するわけにはいかない。長年定着してきた臨地研修は、令和元年（2019）より秋の一泊旅行を止め、さらに令和5年（2023）より秋の計画も止めることとした。春の研修は残すべきであると思っている。ただ、参加希望者の高齢化により、体調不良による突然のキャンセルは辛い。収支バランスを考慮した募集要件を付加して計画を立案していくことが重要かと思う。

江木鰐水の母と妻

吉田 泰義

■ 1、江木鰐水の一生（概略）

文化7年（1810）豊田郡戸野村助兼の庄屋福原余曾八の第三子、諱はユキ、字は晋戈（しんか）、繁太郎と称し、鰐水は号。父は早く亡くなり母に厳しく育てられて、文政6年（1823）福山の五十川（いかがわ）菽齋（しゅくさい）に入門して医学を学び見込まれ菽齋娘、道（のちに政）と結婚し五十川家と縁続きで断絶していた江木家を継いで江木繁太郎となったが、医者を好まず儒学者を志し転身して、21歳で頼山陽に入門し各地遊学修行し名を高め、28歳で福山藩儒官5人扶持（准教授）に登用された。妻の政が亡くなり政の姪の年（のちに敏）と再婚、32歳で10人扶持（教授）上士格となり福山藩主で老中阿部正弘の相談役として福山と江戸を往来し黒船来航時にはペリーと対面、攘夷は非で開国論を唱え阿部正弘の日米和親条約に繋がっている。その後も歴代藩主に仕え長州戦争では幕府軍として石見で敗退、福山藩は官軍に降伏し函館戦争にも参謀として出陣し戊辰戦争は終結した。明治維新後の晩年は福山の治山治水事業を手掛けて福山の先人の森には、鰐水の功績をたたえ石碑が建てられている。明治14年に亡くなった鰐水のお墓は、東京天王寺の谷中霊園にある。『流水不腐 戸樞不蝕』『流れる水は腐らない。常に開け閉めする開き戸の軸は、木食い虫に食われない』という意味。このことから、「常に運動を心がければ、病気に蝕まれず健康を保てる」と説いている。

■ 2、鰐水の母・繁の一生（概略）

備後の沼隈郡山手村小田（現・福山市）の医師、藤井玄好の娘。父の玄好、弟の高尚、甥の好直などの墓は禅宗三宝寺にある。文化5年（1808）福原余曾八の後妻として戸野へ来て文化7年（1810）繁太郎を出産した。文化12年（1815）夫が亡くなり先妻の子と共に養育して、文政6年（1823）繁太郎を医学修行の旅に出し、その後に戸野を離れて、豊田郡入野村の大多和君養源との間に静之助を生んでいるが詳細は不明。三原医院竹村君泰之継室となり天保14年

(1843) 9月16日没(推定54歳) 三原市西町の大善寺には、世に知られていない繁の墓に繁の生涯が刻まれているので原文紹介する。

澄景院貞省大姉 大姉性藤井字古佐志 本州沼隈郡山手村藤井玄恒府君諱好基之女 嫁芸州豊田郡戸野村福原藤右衛門府君諱貞章 性江木戩堀内陶叔 又配同郡入野村大多和君養源 性岡経 後為三原医院竹村君泰叔之継室 天保十四年癸卯九月十六日病卒 葬城西大善寺 大姉性慈而巖教撫三子使遠遊学 其病也経在江都使?告之曰?余病難不起爾学不成勿聴帰埃 其勉勵如此 等有今日皆慈教所成就也 福山教授 江木繁太郎? 中津藩 岡 静之助経 建立

■ 3、鰐水の妻・敏の一生

文政7年(1824)五十川(いかがわ)義集の二女として誕生。天保元年(1830)江木繁太郎(鰐水)と結婚生涯を共にする。長男は早世□□。次男は千之。三男は健吉。4男の高遠を世継と定めていたがイギリス留学中ピストル自殺している。5男の保男を馬屋原家の養子に出していたが江木家に戻し相続させた。6男は松四郎。7男は信五郎。※女子は不明。鰐水を支え多くの子を産み育てたが苦労多く、4男の高遠は優秀で外務官僚として活躍渡米中に亡くなったが、鰐水と共に長生きして江戸で家族に囲まれ幸せな晩年を送っている。

■ 4、おわりに

女性史を語るのは難しい。特に江戸時代の記録はほとんど残っていない。江木鰐水の妻と母…故郷を訪ね歩いて墓参りなど、温故知新の郷土史研究は昔の道探訪会などの一期一会もうしばらく続けたいと思っている。



鰐水の母・繁の墓に参拝

【八本松探訪19】

八本松の神社 (1/3)

天野浩一郎

昨今、私の住む地域では秋のお祭りは簡略化され、若い人たちが少なくなったせいか御神輿の渡御はなくなり、寂しい思いがしています。

私達の祖先は、古くは神聖な山・滝・岩・森などに「カミ」が宿ると敬い、自然を崇拝して日々の安寧を願っていたようです。

やがて仏教の伝来に伴い社殿が建てられるようになり、日本神話の神々や土地の守護神などが神として祀られるようになりました。

江戸・明治期には各村に“村社”が定められ(下表参照)、氏子たちは神様に加護をお願いし、また感謝をしていたと思われます。

名 称	旧村名	主 祭 神
1 雷八幡神社	原	八幡祭神、宗像(むなかた)三女神
2 真光八幡神社		応神天皇
3 小倉神社		菖蒲前
4 筒島神社	吉 川	八幡三神
5 岩蔵神社	篠	大己貴命(おおなむちのみこと)、別雷神
6 梅木八幡神社	正 力	八幡三神、宗像三女神
7 権現社(九郎神社)	米 満	伊邪那美命(いざなみのみこと)
8 大歳神社	飯 田	大歳神(おおとしがみ)
9 天満宮		菅原大神(すがわらいじん)
10 伊勢神社		豊受大神(とようけのおおかみ)
11 清水川神社	原飯田	伊邪那岐命(いざなぎのみこと)
12 鷹巣八幡神社	宗 吉	八幡三神、宗像三女神

■ 1. 雷八幡(いかづちはちまん)神社

(1) 当神社の由緒記によると、創建は貞観元年(859)とあります。また、「原村史」には「弘和二壬戌八月(1382年)」と書かれたと考えられる木製の男神像が女神像と一緒に見つかり、当神社は14世紀以前に存在していたであろうと記述されています。

(2) 江戸時代の祭礼

当神社は原村・下見村・吉川村の鎮守氏神でしたので3村合同の祭礼が当神社で行われました。

原村の「国郡志下しらべ書出帖（文政2年）」には祭礼について次のように書いてあります。

祭礼は8月15日～16日（旧暦）に行われました。15日の前夜神事はその年の稲作の豊凶により氏子の好みで決まり、神楽人の数は増減します。

境内には三つの村の氏子が寄進した数十の灯籠・提灯が飾られ、果物や酒肴を売る店も数多く出ます。近郷隣村の多くの老若男女が集まって互いに戯れ遊び賑わう、この地方の一大イベントでした。

翌16日は本祭で、原町神祇場を御旅所として当神社と真光八幡神社の神輿の渡御祭が行われます。

行列には3つの村の笛や太鼓の囃子方、袴を着た村役人、花傘を冠りたすき掛の流鏑馬、奴などが「エエ・ホウ・ハア」「ヨイ・ヨ・ハア」など声がけし、雷鳴がとどろくようでした（以下、略）。

この祭礼に多くの人が集まり賑やかだったので「人を見るなら原町、衣装見るなら高屋市（福岡神社、高屋堀市）」と言われていたそうです。

（3）原村三社合同大祭

雷八幡神社と真光八幡神社の渡御祭は1890年頃まで続きましたが、その後中断したようです。

大正3年（1914）10月8日、ご大典記念に築調した中山神祇場で原村三社合同（雷八幡・真光八幡・小倉神社）の大祭が行われました。それからは三村社の神輿渡御、各社の囃子奉納などは村がひとつになって楽しむ信仰行事になりましたが、昭和10年（1935）頃には戦争の影響で中止となります。

（4）原三社祭囃子保存会

戦後、一部の地域では囃子の復活が進められていましたが、昭和38年（1963）に“古式はやし”の伝統を残すため、原三社祭囃子保存会が設立されました。そして笛・太鼓・杖振・小太鼓に分かれ、練習や技能向上の取り組みが行われました。

現在は小学生の人数が揃わず、雷神社のみで囃子が奉納されています。

（5）三十六歌仙の額

平安時代の和歌の名人36人の総称“36歌仙”の内、31歌仙の額が拝殿に奉納されています。額には奉納者と思われる名前が書かれていますが、教順寺の住職の書と言われています。



左：大中臣能宣 右：藤原高光
（写真は井川良成氏提供）

■ 2. 真光八幡（しんこうはちまん）神社

（1）「神社明細帳」によると、建治元年（1275）に勧請したとあります。雷八幡神社の摂社であり、祭礼の日や神主さんも雷八幡神社と同じです。明治の初めに大きな村には複数の村社を置く決まりができ、それにより原村の村社になりました。

（2）1965年頃までは当神社、雷八幡神社をはじめこの地方の多くの神社では、“西条神楽”が奉納されていました。この神楽の歌や言葉は明治・大正期の高齢者は暗記するほど身につけて、農作業や宴席でも口ずさんだそうです。

西条神楽には次の特色があったようです。

- ① 対話が多く、滑稽なセリフや道化役（さんきち・ちょうきち）が入り、また笛・太鼓・手すり鉦のテンポが速く勇ましい。
- ② 衣装の美は競わず、白衣に袴を着用する。悪魔払いには、猿田彦の面・女面・翁面・鬼面・大蛇・狐面・道化面など様々な面がある。
- ③ 神楽は“清めの舞”“手草（たぐさ）の舞：神を迎える”“悪魔祓（あくまはらい）”の順で進行する。

（3）昭和20年（1945）に入ると米軍の空襲が激しくなり、都市部の高学年の小学生や中学生は田舎に団体で疎開をしました。

広島高等師範学校附属中学校1年生100余名は7月に原村に疎開し、真光八幡神社と教順寺に分宿しました。その17日後に原爆が広島市に投下され、幸いにも生徒達は原爆による大惨禍を免れました。

生徒達は50年後、食料が困窮の時期に原村の人達が自分たちを受け入れたことなどに感謝する、石碑を教順寺に建立しました。



疎開感謝の碑

(参考文献:「原村史」他)

没後400年で脚光 毛利輝元

蔵楽 知昭

広島城を築いた毛利輝元（1553～1625）がいま注目されている。没後400年という節目の年にあたることから、広島城に銅像が建てられた。輝元が人生のうち最も長い時期をすごした吉田郡山城のある安芸高田市でもさまざまな記念行事を企画している。

毛利氏の歴史というと、毛利元就ばかりが目目されがちで、輝元がいまひとつ地味な存在だが、その足跡をたどると、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と「戦国の三英傑」と対峙しつつ生きた「したたかさ」を感じさせる。改めて輝元の生涯を知る、よい機会になるのでは、と行事に期待している。

輝元は天文22年（1553）、毛利氏当主・隆元の子として誕生、祖父は元就だ。11歳のとき隆元が急死、この時元就は67歳、後見人として、輝元を支える吉川元春、小早川隆景ら「御四人体制」を敷いたうえで、元就は75歳で死去する。以後、戦国の世で毛利家は織田信長と対立するようになり、將軍足利義昭を頼の浦で庇護し、本願寺合戦、備中高松城の戦いを経て、豊臣秀吉政権のもとでは五大老の一人となった。この間、天正17年（1589）広島城の築城を開始、朝鮮出兵を経て関ヶ原の戦いの際には、西軍総大将となる。その結末はみなよく知るところで、西軍の敗戦にともない防長転封となる。徳川政権下では、長男の秀就を初代長州藩主として、萩城で暮らし、大阪の陣で豊臣家の滅亡をみたのち、寛永2年（1625）、73歳で死去した。

動乱の時代とはいえ、何度も危機に見舞われ、浮き沈みの激しい、まさに波乱の生涯だった。どう乗り越えたのか、興味深い。

6月1日に安芸高田市で開かれたトークフェスをのぞいた。同市では歴史民俗博物館で年末までさまざまな事業を企画しており、その幕開けイベントである。

トークフェスでは秋本哲治・同博物館副館長

の司会で、元下関歴史博物館の田中洋一氏らが足利義昭の頼幕府などについて語った。各地の城をドローンで空撮、ネット公開している堀切凡夫氏や、当日発行された「まんが毛利輝元」の作者・パニック熊さんも姿を見せて、輝元のさまざまな側面が紹介され、約120人の聴衆をわかせた。今年末まで公開講座やシンポジウムが予定されている。



輝元をめぐるのは、後継者として養子に迎えた秀元（穂田元清の次男）が、秀就誕生に伴い世継返上している。秀就の母（輝元の側室）は児玉氏の娘（周（かね）姫（ひめ）二の丸）だ。周姫は、山口・宇部の財満氏をめぐる話などで、当会ではおなじみの女性だ。秀元もめまぐるしい時代を生き、養子、実子をめぐる親子の葛藤など人間くさい話もありそうで、どんなかたちで輝元に脚光が当たるか、この機会を大いに楽しみたい。

山城を～知りたい～見たい～歩きたい 東広島山城 第2集完結編を刊行しました

発行日 2025年（令和7年）5月5日

発行者 東広島郷土史研究会 吉田泰義

印刷 イトウ印刷

部数 200部

価格 1,100円

グループ研究会「山城探訪会」は、2024年3月をもって活動を終了し、「昔の道探訪会」として里山の昔の道を巡る活動に移行しました。

それを受けて2025年5月5日、山城探訪会の第41～70回の活動をまとめた冊子「山城を見たい～知りたい～歩きたい 東広島山城 第2集完結編」を刊行しました。

活動当日の様子や訪れた史跡の詳細などを、グループメンバーの感想文という形でつづった記録です。ページをめくれば、まだ登ったことのない山城の記録と出会えるかもしれません。

部数に限りがありますので、購入をご希望の

方はグループリーダーの吉田さんに早めにお声がけください。

山城を～知りたい～見たい～歩きたい

東広島市の山城

第41回～第70回・第2集完結編



東広島郷土史研究会
山城探訪会

第48回 県史協 呉市倉橋大会のご案内

日 時：10/26(日) 9:30受付

場 所：呉市倉橋町431

桂浜温泉館 2F なぎさホール

資料代：1000円、弁当注文1000円

参加をご希望の方は、國松宏史 (090-7979-6234) までご連絡ください。申し込み締め切りは8月23日です。

《新規会員紹介》

川手 亨 (八本松町)

上田 秀 (西条町)

上田 祐子 (西条町)

井藤 雄輝 (八本松町)

小鴨加代子 (西条町)

【新規会員募集中】

活動が気になる方は、下記 QR コードから覗いてみてください。



Instagram



HP



Facebook

【郷土史研究会ニュース原稿募集のお知らせ】

郷土史研究会ニュースの原稿を募集しています。会員ならどなたでも紙面で発表できます。パソコンが苦手な方は手書きでOKです。ぜひ、ご寄稿ください。

グループ研究会ご案内

第298回 古文書研究会

と き 7月15日(火) 13:30～

ところ 市役所北館 市民協働センター

テキスト 国郡志御用ニ付下弾帳賀茂郡冠村①

第195回 石造物研究会

と き 7月22日(火) 13:30～

ところ 市役所北館 市民協働センター

内 容 石造物に関する座学

第195回 四日市町並研究会

と き 7月14日(月) 13:30～

ところ 西条本町歴史広場 小島屋土蔵

内 容 「酒都西條」とりまとめ

昔の道探訪会 (旧山城探訪会)

と き 7月16日(水) 9:30～

ところ 白市観光駐車場～白市交流会館

内 容 東広島の紙芝居本の編集その他

原爆資料保存研究会

と き 7月17日(木) 14:30～16:00

ところ 市役所北館 市民協働センター会議室

内 容 平和学習バスなどの諸イベントについて

7月の図書室開放

と き 7月18日(金) 13:00～15:00

ところ 高屋教育集会所

会計担当および役員一同からのお礼

会費の納入をありがとうございました



令和7年度の年会費お支払いにご協力いただき、誠にありがとうございました。より良い運営に役立ててまいります。

なお、まだお支払いが済んでいない方は、お早めに会計の三嶋さんまでお支払いください。

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース

第611号

令和7年(2025)7月5日発行

編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男

事務局長 國松宏史

会報編集 進藤真由美